

鳥城

第82号

令和4年6月発行
(2022年)

発行

岡山県俳人協会

事務局

〒700-0824

岡山市北区内山下
2-5-10 角南方

TEL (086) 223-7519

振替口座01380-0-102923

(年会費専用)

令和4年度定例総会開催

決算、予算を承認、事業計画を決定

令和4年度の総会が、3月13日(日)岡山県立図書館多目的ホールで開かれた。コロナ禍の為、平成31年度以降中断、3年ぶりの開催で、受付での検温、手指の消毒を始め、会場にも種々の感染予防対策がなされた。参加者には、合同句集第十六集の引き渡し、十五集・十六集の販売も行われた。

10時30分、三垣博常任幹事の司会で開会。出席者53名、委任状131通で、総勢252名の3分の2以上、会成立との言のあと、前回以降の物故者三氏に一分間の黙祷。

続いて曾根薫風会長の挨拶。「令和になって初めての総会。会場も定員の2分の1が上限。又このような時期に開催してもいいのかとの声も。そのような中、菅波氏(AMDA)の、ペストが終息したようにきつと終息するという捉え方にほっとする。開催の困難はさまざまあるが前向きに考えていきたい。この度、ネット句

会で全国とも繋がっている、もも句会の山本哲史氏に新しく幹事になって頂いた。岡山県俳人協会は趣味の集団、会長は私で8代目だが絶対に絶えさせてはならない。楽しく存続させていきたい。」

新会員は37名、うち出席者は7名。

磨家泉常任幹事が議長に選任され議事に移った。令和3年度事業報告・決算報告。監査報告後採決、承認。令和4年度事業計画・予算案の提案、承認。事業内容を各担当者が説明。新幹事の紹介と勇退幹事の報告。山本哲史氏のもも句会の現状報告のあと会長より手渡された助成金に対して、「岡大で行うのだがコロナで集まらずケータイや通信で。でも、会つての句会、句評が楽しい。それに使わせて頂く。有難い。」と謝辞。

柴田奈美副会長の「協力を得てスムーズに運ぶことができた。次回もよろしくお願いした

い。」との閉会挨拶で滞りなく終了した。

令和4年度事業計画

1 総会 3月13日(日)

岡山県立図書館2階多目的ホール
吟行句会

春季・4月17日(日) 岡山県立図書館
秋季・未定 岡山県立図書館

3 第43回俳句大会 10月16日(日)

講師 伊藤伊那男先生

(俳人協会評議員)

会場 岡山国際交流センター2階

会報「鳥城」 6月と12月に発行

第十六集合同句集 隔年発行

令和4年3月配布

6 会員名簿 来年度作成予定



総会会場風景

7 協賛事業

現代俳句の書展 3月8日～3月13日
岡山県天神山プラザ第1展示室
倉敷市文化祭俳句大会 5月28日(土)
倉敷市民会館2階大会議室

句会は13時より山本一穂常任幹事の司会で、持ち寄り2句、108句を互選3句、特別選者は5句選うち1句を特選。披露、入選句の表彰。赤木ふみを顧問の「コロナ状況下、個人個人の賢察の上参加を。」との挨拶で会を閉じた。
(樋口千恵子)

選者特選句

曾根 薫風特選

首タオル取つて畳屋針供養

高木 幸子

大倉 白帆特選

パスワード打てば開くや蝶の昼

柴田 奈美

石見 邦慧特選

心地良き土の抵抗耕せり

丸山 敏幸

島村 博子特選

首タオル取つて畳屋針供養

高木 幸子

小橋さち江特選

春待つや大小並ぶスニーカー

石見 邦慧

山本 哲史特選

梅が香やマスク片方だけ外し

山本 一穂

互選高点句

春潮へ足で蹴り出す漁舟

首タオル取つて畳屋針供養

今日なにもかも春らしく汀子逝く

護摩焚きを煽る読経や春ならひ

角南 英二

高木 幸子

脇本 妙

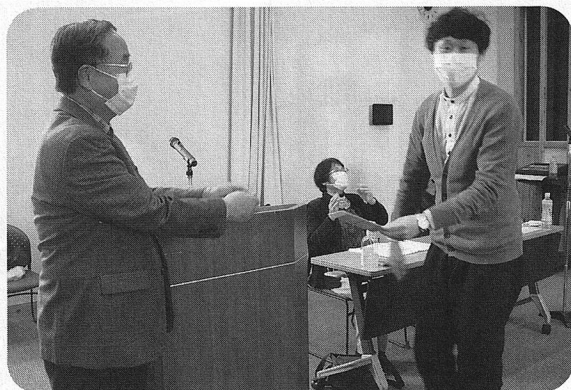
赤木ふみを

パスワード打てば開くや蝶の昼
梅が香やマスク片方だけ外し
鶯のこゑを背の畝づくり
畜魂の塚へしづむる忘れ雪
凍返る被弾の跡のぬひぐるみ
三桎の咲くや父子の義民塚
草萌や少年の焼くパンケーキ
色鉛筆の三十六色囀れり
春待つや大小並ぶスニーカー
歳時記の上に微睡む春炬燵
木の芽風吉備路の丘はみな古墳
筈は鉄の疵ごと届きけり
下校児の列の乱れやつくしんぼ
石室に日矢の一点寒仏
もののふの夢のかげらや犬ふぐり
千年を受け継ぐ堂の春燈
貨車軋む鉄路の闇や冴え返る
二百年見て来し雛の硝子の眼
春耕や戦地の叫びラジオより
啓蟄や把手のゆるぶ小抽斗
乗替のホーム遍路の吹かれをり
ランドセル出しては背負ひ春を待つ

柴田 奈美
山本 一穂
岡本三恵子
高杉 浪子
谷本 俊夫
高木 幸子
広畑美千代
山県 章宏
石見 邦慧
中山 敏子
磨家 泉
深谷 直子
岡本三恵子
中山 敏子
赤木ふみを
小林 克己
神宮寺恵子
角南 知子
近常 倫子
松尾 佳子
古谷 静
小橋さち江



受付風景



もも句会へ助成金の授与



入賞者表彰

俳句不毛の時代——いま一度「俳句は

自得の文学」

涼野 海音

「何度読んでもいいな」と思う句に、つくづく出会うことが少ない。良い俳句は反復可能なみずみずしさを持つ句である。大方の句は、一度きりの意外性やインパクトに感心するだけで終わってしまう。瑣末写生の句、肝心の季語が添え物になっている句、ただ事俳句が俳誌にあふれている。季語の本質を捉えてかつ余韻のある句に出会うことは滅多にない。

いま流行しているのは、俳句を「ネタ」にしたイベント・地域おこし、カルチャー教室、結社・協会への勧誘活動、俳人のメディア出演ではないだろうか。

私には、文芸としての俳句の質が上がついているとはとうてい思えない。様々な結社誌を見る限り、選句基準のハードルは大きく下がっている。五句出句で三〜四句入選の結社が多いようだ。一句欄がある結社誌はまれである。中には会員の半数以上が「自選同人」（＝選句も添削も全くない）の結社もあるようだが、果たしてそれは結社といえるのだろうか。

また作品に基づく選句ではなく、「年功序列」「主宰との関係」「結社貢献度」など、他の力学が働いた選句になっている結社誌もあるようだ。このような理由で、同じ人の句ばかりが巻頭やその近くに並んでいる結社誌をしばしば見る。投句するだけで十分に学べる結社誌がいかに少ないことか。このように結社誌は、形骸化がかなり進んでいる。

結社の時代が終わり、総合誌も徐々に淘汰さ

れる時代を、私はひしひしと予感している。協会や結社の中心にいる俳人ばかりを起用する総合誌の編集はマンネリになり、大勢の購読者を逃している。総合誌ではなく単なる「業界誌」になっているのである。私は総合誌を毎月すべて読んでいたが、残念ながら、特定の俳人（都市部在住の著名俳人、一部の若手俳人）しかほとんど登場しない。これで果たして総合誌といえるのだろうか。

このように俳句の世界が不毛な時代であるからこそ、私はいま一度、「俳句は自得の文学」であることを強調したい。いつの時代も俳人はどこかで知らぬ間に誕生し、きつと自ら育っていくはずだ。（どのような勉強手段を取るにしても）。「俳句は自得の文学」であるという覚悟をもった人たちが、これからも俳句を継続していくに違いない。

第43回岡山県俳人協会俳句大会

日時 令和4年10月16日（日）

会場 岡山国際交流センター2階

講師 伊藤伊那男先生「銀漢」主宰

昭和24年長野県伊那谷生まれ

昭和57年皆川盤水の「春耕」入会

句集に「銀漢」（俳人協会新人賞

受賞）『然々と』（俳人協会賞受賞

ほか

俳人協会評議員

演題

「芭蕉の謎 曾良の謎——おくのほそ道」を巡って——

投句締切

6月30日（木）必着

俳句雑話⑥

日本庭園と吟行

山本 一穂

趣味の一つが日本庭園巡りである。専ら奈良平安から江戸期の歴史あるものを。北は平泉の毛越寺から南は鹿児島知覧の庭、沖縄の識名園まで。この四十年間にこれこれ百二十庭は巡っている。関西の生活が長く、名庭の多い京都が近かつたこともきっかけであろう。京都は長く日本文化の中心で名勝（重文）、特別名勝（国宝）指定の日本庭園の集積がある。俳句に手を染めたのは十数年前、庭園よりずっと後だが。以来格好の吟行地としてこれを利用してゐる。ただ庭を対象として佳句が出来た記憶が殆どない。名庭はその美しさ、味わいが語り尽くされ洗練された夢空間とも言える。五七五に落とすとしてもどこか既視感、類想感が拭い切れない。このため園内では俳句の構えを解き、ぼんやり歴史と静寂に浸ることとしている。庭園の界隈の町並、景物を回り、締めは居酒屋又はおでん屋へ。地元の庶民的な旬の食材や話題、訛などにもめぐり合える。ほろ酔い加減で宿や自宅に戻ってからは俳句となる。ふり返り十句程度が句帳に納まる。庭園の句は少なく、界隈の景物や生活の句が多くなる。庭園は吟行への誘い水なのだろう。体力の続く限りとは思っているが。数ある名園の中では、独断だが第一は我が郷里金沢の兼六園。その風格と奥深さ。京都の西芳寺（苔寺）も秀逸。殊に雨後のえも言われぬ気品。近辺では玉島円通寺の巨岩も見事。佇めば太古の世に引き込まれるようだ。兼六園からは徒歩十分で市民が日本一と自負するおでん屋街へ。

第十六集合同句集鑑賞

俳句の領域

杉本征之進

はんざきも地球も化石かもしれず 綾野 静恵

はんざきは数千万年前から姿を変えています。あの大きな扁平な頭、小さな眼、前脚四本後足五本、左右に翼々があり、大きなものは一メートルを遙かに超えています。グロテスクと言えばグロテスクですが、愛嬌があるとさえ言え、愛嬌があります。

このはんざきと吾々の住んでいる大きな天体、美しい地球を同列に「化石かもしれず」と断定されました。

俳句は虚と実が程々に詠われているのが理想ですが、この句の場合虚が実に遙かに勝っています。俳句としては考えさせられますが是としました。俳句に領域はありません。

古備前の意図ある歪み秋深し 平田千恵子

備前焼は千年の伝統があり、特に鎌倉時代から桃山時代にかけて焼かれた作品は古備前と言われて珍重されています。

特に茶器などに味わい深い作品が多いのですが、殊更に姿形を歪ませて作られたように見えます。が、実際は焼き締めなどによって自然にできた窯変なのです。

中七の措辞「意図ある歪み」の把握に新しさを感じました。古備前の愛好家にはこの様な把握は出来ません。また季語も動きません。

日常の生活を詠む

難波 政子

切り抜きの後の新聞鳥渡る

広畑美千代

〈写生とは焦点を定めあつと思つたことを切り取り、在り来りでなく他の人が表現していない方法で詠む〉と大会の講師から学んだ。

この句はまさに切り抜かれた「後の新聞」に焦点を絞って描き、写実的な把握のみが提示され、作者の伝えたいことは句の裏側にある。

朝、次々に家人を送り出したあと一人居を楽しんでる作者。折しも窓から見える渡り鳥の群。室内の様子と戸外の大景が的確な省略によつて一句にまとめられ、一編の小説が生まれそうな余情に富む好句である。

数へ日や漢方薬の大袋

湯原 愛枝

通院の景であろうか。句意は一読して明解。何もかもが忙しく、心急ぐ年の瀬、漢方薬で高張った大きな袋を提げて家路を急ぐ作者の姿が見えるようだ。「大袋」が何とも適切な把握で「数へ日」の季語が効いている。私も同じような経験をしたばかりなので、大いに共感した。

上五が「季語＋や」、下五が「名詞」の基本形の句で内容によつては陳腐な句になりがちな形を見事に解決しているのは、季語の選定であり、中七下五の真つ直ぐ詠み下した勢いにある。言葉を飾らぬ良さが感じられ、俳味を漂わせ

た面白い一句。

俳句とは。そして芭蕉とは。

吉原多佳子

牙ゆる夜の秒針の秒きざむ音

清中 蒼風

作者のコメントより引用すれば、俳句の真の面白味は極端に短い定型という枷ゆえに、時間、空間、存在（生命）などの哲学的命題を禅のように端的に掴まねばならぬ故に、入口は広いが奥の深い文芸である。掲出句もまさにかみしめればかみしめるほど味のある情景が浮かびあがってきます。

時計の針の音と季語がうまく響き合つて余韻のある一句に仕上がっていると感じました。

渾身の枯野の一句残しけり

杉本征之進

義仲寺の秘宝「芭蕉翁絵詞伝」の公開を見学されたとのこと。義仲寺には芭蕉のお墓がある。俳句に携わつていれば訪れたい場所では。十句すべて俳聖と言われた人をモチーフに作句されているので、あえて一句と言われると掲出句に。



句の背景

大森 哲也

折鶴は指が覚えて広島忌

磨家 泉

広島は原爆ドームには多くの千羽鶴が飾られています。その千羽鶴を折るとき、考えなくても独りでに指が動き形を成していく、平和に対する作者の強い思いが伝わります。ロシアのウクライナ侵攻は庶民に甚大な被害を与えていますが、これは先の大戦の米軍の無差別爆撃や旧日本軍の侵略戦争にも通じます。

平和あつての人生です、俳句です。

このほか作者には、練りぬかれた表現の工夫と景の雄大さを感じる秀句があります。

「一条の滝もて山をひきしむる」「霧ぶすま開き借景の山の立つ（2021県俳）」

晩秋の風詠む浅黄斑かな

赤木 ふみを

浅黄斑蝶は、藤袴の蜜を求めて数千キロを移動するといわれています。小さいか弱い体で、信州辺りから九州までよく飛び回ります。

作者は、この蝶と邑久の大賀島で出会い、秋風を読みその風に乗り空から風景を見る蝶の旅を、「風詠む」と素晴らしい表現にしました。句またがりにして、その健気さを強調した背景には、この蝶が身に害毒を持ち途中で鳥に襲われた時は、わが身を犠牲にして鳥に食われ、仲間を救う習性を感じ入った事もあるようです。晩秋の爽やかさとはかなさを感じる一句です。

昭和の物語

浮田 雁人

ほろ苦き昭和の思ひ出夏の雲

井手 房野

昭和で最大の出来事は、第二次世界大戦である。この戦争では民間人を含め、犠牲者は三百万人とも言われ、この時代を生きた作者の思いは、筆舌では言い表せない程の苦労をされたと思う。と言う私は戦後生まれであり、戦争体験者ではありませんが、「ほろ苦き」と言う言葉と、終戦のきっかけとなった茸雲が夏の日の出来事であり、夏の雲の季語が全てを物語っている。ちなみに作者の略歴欄から計算すると百歳を超えておられ、あやかりたいものである。

太箸の十一膳のよき日なり

鍋谷 恵子

太箸は柳箸とも言われ正月には欠かせない縁起物である。と言いつら核家族化が進んだ現在では、正月に対する意識もしだいに希薄になって来た。勿論家の間取りも然りである。ではこの句はどうだろう。太箸の十一膳は大変な数である。箸袋にそれぞれの名前を書き、それに対する料理が必要な事を考えると、気の遠くなるような話であるが、これをいとも簡単に「よき日なり」と言った。そこに家族との絆が見えて来る。かつてはどの家もこの様であり、家中が笑い声であふれていた。その時代を懐かしく思ふ一句である。

平明な表現で深い余情

田中 京子

一条の滝もて山をひきしむる

磨家 泉

この句が目飛び込んできた時衝撃を受けた。俳句結社「嵯峨野」に入会し四代の主宰にお世話になっている。離れている為もあるが俳句について語ることも無く、実作の場では「平明な表現で深い余情を」と言われているが今だに平凡を脱していない。実際に滝を何度か詠んだのがあるが、こんなに完結に言い切ってしまうのは難しい、私には無理だ。この句はまさに私の目指す一句と思った。

まだまだ私は俳句途上にある事をうれしく思う。

轉の透きとほりたる行者道

高木 幸子

登るほどに街騒も消え、轉りだけ聞いていると雑念も去り、研ぎ澄まされ登ることに一生懸命になる。鎖、馬の背、断崖を、私も石鎚山へ三回登りご神体にあふれた。やはり特別の力を受けた経験がある。三徳山では智、仁、勇を得られ良い句がそろったと思われる。

岡山の俳人協会では結社の数も多く、大会、講演、吟行等活発で良い刺激を頂いている。句友、合同句集は私の宝として共に歩んでいきたい。

言葉の奥にあるもの

森脇 八重

花堤もどりし傘のしづく切る 馬屋原純子

この句の背景と思われる井原市の中心を流れる小田川の二キロに及ぶ桜並木は、岡山県西部屈指の名所となっています。

掲句は、「花堤」という上五により延々と咲き連なる土手の桜が浮かび上がってきます。あいにくの雨となつてしまつたお花見から帰り「傘のしづく切る」という措辞で、雨が想定外だったことを窺い知ることができます。少し残念だった心の内を覗かせつつの安堵感が伝わってきます。

全体に無駄な言葉が無く、雨の日のお花見の始終が的確に詠い上げられていると思います。

ひとつ老い一つしがらみ捨て涼し 竹本 孝

題名には、「八十路」とあり、作者は今後もし日記代りに俳句をと述べておられ、同世代である私も共感するところです。

ひとつ老いいることの重さ、一つずつしがらみを捨ててゆく勇気をしっかりと持ち、行くべき道を見出した時、無となれるのだと思います。リフレインによる効果と、季語「涼し」の斡旋により、凜とした思いが伝わり俳諧味が醸し出されています。

折に触れて素晴らしい感性と表現力に感銘を受け学ばせて頂いています。

季語の持つ力

中山 敏子

残り世や春風に髪かき上ぐる 古谷 静

我々の年になるとこの先いつまで生きられるのだろうかと考えることがしばしばあります。独り暮らしの作者は、それを「残り世」という言葉でさらりと表現されています。

それはともすれば暗い気持ちになりがちですが、それを払い除けようとする気持ちに「髪かき上ぐる」に表れているように思います。

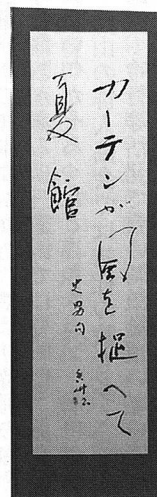
さらに季語の「春風」はのどかで暖かい風です。季語の力により決して憂うのではなく前向きに生きていこうという作者の意気込みを感じました。

折鶴は指が覚えて広島忌 磨家 泉

初めてこの句を読んだ時「指が覚えて」という言葉に意表を突かれました。確かに我々がこれまで一番たくさん折ってきたのが折鶴ではないでしょうか。そのため頭で順番など考えなくても確かに知らぬうちに折りあがります。それはまさに指が覚えているのです。それを俳句に詠まれた作者に脱帽です。そして何といつても季語の「広島忌」に作者の反戦への思いを強く感じました。

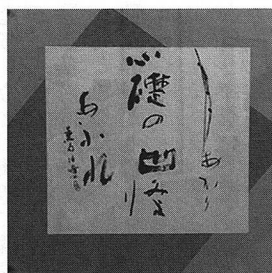
現代俳句の書展

令和4年3月8日～13日
於 岡山県天神山プラザ



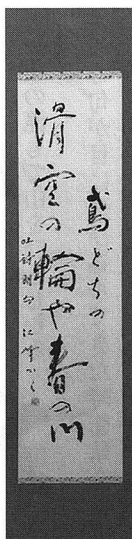
カーテンが風を捉へて夏館

佐藤史男
伊丹香竹氏書



月あかり心礎の四みよりあふれ

景山 薫
三宅佳峰氏書



鳶どちの滑空の輪や春の川

内藤吐詩朗
土屋江峰氏書

(第十四集合同句集より)

春の吟行句会

— 新緑の岡山城・後楽園 —

春季吟行句会が令和4年4月17日（日）岡山県立図書館多目的ホールを会場に開催された。参加者は43名。吟行地は秋の吟行と同じ岡山城周辺や後楽園等であった。

午前11時30分の投句締切、ひとり3句の出句を目指しそれぞれ句材を求め散策。

広々とした後楽園には観光客の姿も少しずつ戻り始めた感じがあり、結婚の前撮りをするカップルも数組見受けられた。躑躅が咲き始め、濡れ色の緑の木々が池の面に映り、秋とはまた違った句材、季語に溢れていた。岡山城はあと数日で工事シートが外れるとのことであった。日差しに光る鯉の尻尾、石垣の桜若葉などを遠見して、新しい鳥城を想像しながら吟行。

午後1時、曾根薫風会長の「コロナはなかなか終息しないが、何とか開催でき、吟行を待っていた皆さん、会員外の方も含め多くの参加があり、大変嬉しく有難く思っています。どんな時でも俳句が出来るということに、改めて俳句の素晴らしさを感じます。数時間を一緒に楽しみましょう。」との挨拶で句会開始。司会は左居正恵吟行担当。

作品集が配られ、129句の作品より3句互選、特別選者は5句選内特選1句。かなりの厳選で、選句が終わると皆さんホッとしたような表情が見受けられた。

披講、採点と進み、特別選者による特選句等の講評の後、高句句などの表彰がなされた。次回秋の吟行を約する赤木ふみを顧問の挨拶で予定通りの午後3時に閉会となった。

（小倉貴久江）

特別選者特選句

曾根薫風選

麗かや花嫁同志すれ違ひ

難波政子選

うららかや返却ポスト口三つ

大倉白帆選

御舟入り跡てふ静寂竹の秋

景山 薫選

朝光に遍く濡る楠若葉

角南英二選

殿様の庭に生まれて蜷の道

互選高句

石見 邦恵

佐藤 史男

佐藤 恭子

中山 敏子

平田千恵子

平田千恵子

松尾 佳子

揚雲雀空の一点鳴き焦がす
図書館のガラス全面緑さす
春風に乗る耕作の「赤とんぼ」

井田の太古の鼓動蓮芽吹く
百間の馬場に散り込む桜葉
御舟入り跡てふ静寂竹の秋
名園へたどる近道花は葉に
蒼天や闘志を秘むる松の芯
うららかや返却ポスト口三つ
園の風集むるしだれ桜かな
城いまだ覆ひを脱がず春逝けり
石垣の銃眼かすめ春落葉
内堀の大河の風を燕斬る
先頭のカヤック立ち漕ぎ風薫る
手庇の中へ納めて揚雲雀
箒目に躍る音符や春落葉
朝光に遍く濡る楠若葉
雀跳ね子らの声跳ね楠若葉

藤井 正彦
大倉 白帆
角南 英二
左居 正恵
浮田 雁人
佐藤 恭子
小倉貴久江
藤原 照子
佐藤 史男
赤木ふみを
難波 政子
古谷 静
三垣 博
中山 敏子
安藤 加代
深谷 直子
中山 敏子
平田千恵子



後楽園 沢の池にて



井田にて



お濠より 岡山城を臨む



花水木の下で一句

会員の活躍

◇涼野 海音

「俳句界」1月号

「リレーエッセイ 今を詠む」VOL.15

北斗賞作家がそれぞれの今を詠むリレーエッセイ。「勇気」をテーマに寄稿。

鳥渡る武人の埴輪肩欠けし

「俳句界」3月号

「北斗賞作家競詠」

未知の空

笹舟に野焼の煙流れ来る

涅槃会などの日向にも人の声

未知の空あり風船に青年に

◇大倉 白帆

第37回聖良寛文学賞受賞

文化、文学活動で功績を挙げた岡山県ゆかりの人を表彰する聖良寛文学賞を受賞。学校や図書館で子どもたちの指導にあたり、文学賞の審査員を務めるなど、郷土の俳句界の発展に貢献。

◇工藤 泰子

第36回俳人協会評論賞候補作品に選出。

「やんぬるかな 赤」

「やんぬるかな 青」

作品は令和3年6月発行「鳥城」で紹介。

◇松尾 佳子

第23回NHK全国俳句大会

堀本裕樹選 自由題特選

小鳥来る付箋のふゆる料理本

◇角南 英二

「俳壇」5月号

「今月の有力同人」

鱈東風

立春の雲相輪に触れゆけり

潮引けば繋がる島や霧ぐもり

合掌に組む神名備の春子楳

新会員紹介

南 登（白梅句会）

富士の絵の公衆浴場柚子ぶかり

太田 捷子（あくら）

名園に遊ぶ句友ら梅ふふむ

（「鳥城」第81号以降）

今後の主な行事予定

第43回俳句大会

10月16日（日）（詳細は3ページに）

岡山国際交流センター

秋季吟行句会

11月27日（日）早島町ゆるびの舎

編集後記

写真 小林克己 小倉貴久江
カット 佐藤史男



文は人なりというが今回も皆さんから豊かなコメントをいただいた。編集担当でなければこんな味わい方はしないかも…。一番楽しんだのは私。感謝。（石見邦慧）
いろいろな方が、いろいろな句の鑑賞をされて、それがみんなの財産になっていく。そんなことをしみじみ感じた今号の編集でした。ありがとうございました。

（内田ひわ）

コロナ禍のため中断されていた総会が三年ぶりに開催され、久々に皆様方とお会い出来、嬉しく思っております。コロナの早い収束を願うばかりです。（岡本三恵子）
ロシアの侵略によるウクライナの惨状、なかなか減らないコロナ感染者など暗いニュースのなか、毎日の生活を大切に前へ進みたいと思っています。（原田慶子）

コロナ禍に入り三年目を迎えました。岡山県俳人協会の活動も、形を変えながらも少しずつコロナ前に戻ってきています。今回も多くの方にご寄稿いただきました。お礼申し上げます。（広畑美千代）